

早稲田大学 政治経済学部 4年

古川 航太郎(1A181255-5)

高橋恭子ゼミ 卒業論文

日本ミュージカルの課題と展望
~劇団四季の経営軌跡から考察する~

<概要>

日本公演通算回数が五千回を超える、あるいは越えることが予想されるクラスのミュージカル（キャッツ、オペラ座の怪人、ライオンキング、美女と野獣、アラジン、アナと雪の女王）を5本以上持つことは、すでに劇団四季が興行会社として成功をおさめていることを証明している。

だが一方で、それは、「海外で成功したミュージカルを日本語に翻訳しているだけのこと」との批判を免れない。少数であれ一部の人間から劇団四季が「猿真似団体」と揶揄されることの本質は何か。私はその経営軌跡から発展の政治的あるいは経済的要因を探ることで、日本のミュージカルの変遷も同時に解明することができるのではないかと考え、以上を問題意識として設定する。

本研究では、ミュージカルの定義、その魅力、歴史を考察し、現在の劇団四季とその今後の展望を記すことで、日本において唯一の無期限ロングラン公演を実現している劇団四季の向かうべき姿を考察したい。

また、ミュージカルの歴史をメディアとの関係性や国内外の両観点から考察し、国内を代表するミュージカル団体である劇団四季の経営軌跡に焦点を当てることによって、ミュージカルの本質と日本独特のミュージカルのあり方を追求することとする。そのような知識知見を理解した上で、改めて日本のミュージカルに関して考察し、劇団四季の経営課題とその解決のために今後目指すべき姿を提言することを本論文の目的とする。

特に以上の考察において、劇団四季の創設メンバーの一人であり、長年その中心人物であった浅利慶太氏の政治的、社会的な行動にも注目した。いわゆる一般的な芸術家や演出家とは大きく異なり、その手腕において稀有な人物であったことも劇団四季の発展には必要不可欠であったことを明確にしたい。